

三ノ側遺跡

今回の三ノ側遺跡の調査では主に古代から中世・近世にかけての遺構が発見されました。とくに細長い長方形の溝状遺構が多く発見されましたが、今回の調査ではこの溝がいくつか合体したようなものが見つかり、連結溝状遺構と名付けました。掘ってみると場所によって深さが違い、それぞれの溝状遺構に単位があることがわかります。遺構の覆土から土師質土器や渡来銭が出土しており、中世に造られたものと考えられます。三ノ側遺跡では古代から中世、近世と連続的な土地利用がされていたことが分かります。



さまざまな産地の甕

今回の発掘では地元産の甕のほかに、甲府盆地や静岡東部、神奈川西部で作られた甕が見つかっています。

甕を通して、都留で生活していた人々の交流の様子がみえてきます。

大石遺跡

国道20号大月バイパスの建設により新たに発見された本遺跡は、発掘調査により縄文時代早期末から中期、弥生時代中期、奈良・平安時代、中世以降のバラエティー豊かな遺物が発見されました。また奈良・平安時代の竪穴住居跡が2軒発見されたことは人が住む環境について新たな見解をあたえることとなります。相模川水系のひ



つつである桂川の支流笹子川の右岸には今まで遺跡がほとんどありませんでした。本遺跡の発見によって遺跡の立地について考え方がかわることでしょう。



住居跡から現れたカマド

竪穴住居跡の1軒は東西4.8m、南北4.0mの東西に長い長方形で北壁に煮炊きをするかまどがあります。調査をはじめたときは住居の中に大きな石がたくさんあってかまどの姿がわかりませんでした（上の写真）、余分な石などを取り除いた結果、石で作られたかまどが現れました（下の写真）。

でもこの住居跡の最大の特徴はかまどの煙道が1m以上あることです。

発掘調査速報

The News of excavation

平成27年度の山梨県埋蔵文化財センターは、6遺跡の発掘を行いました。

甲府城・甲府城下町・谷村城・身洗沢遺跡・大石遺跡・三ノ側遺跡。

発掘調査は終了しましたが、今後の整理作業を進めることで、発掘だけではわからなかった新しい知見が出てくると思われます。

甲府城下町

甲府城下町遺跡（NTT西交差点地点）は、江戸時代を通じて庶民が住んだ町屋にあります。約36㎡というせまい範囲の発掘調査区に数多くの遺構や遺物が検出しており、甲府庶民の土地利用の濃さがうかがえます。

写真1は生活用水を溜めておく水利施設です。石で区画した導水路に堰を設けて、水を溜める構造をしています。遺構内からは将棋の駒や碁石、硯、杯などが出土しており、当時の土地空間の利用や生活のようすが見取れます。



宿場町の櫛

水利施設から160点を超える木製櫛が出土しています。調査地点周辺は江戸時代に宿場町「柳町宿」として成立し、飯盛女をおくことが許可されていました。木製櫛は、宿場町に勤める女性たちが使っていた道具であったと考えられます。



身洗沢遺跡

身洗沢遺跡の調査はすでに終了し、現在は遺物の復原などの整理作業をおこなっています。

調査区の中央付近からは弥生時代後期の溝などが確認され、周辺からは多くの土器片が出土しています。土器は小片が多く、上流から流れ込んだものと考えられますが、中には大きく復原でき資料も確認されています。

写真は弥生時代後期の平底甕（ひらぞこがめ）で、中部高地系の土器です。食べ物を煮るのに使用したと考えられています。



出土した木製品

身洗沢遺跡では多くの木製品が出土し、又鋏（マタグウ）と呼ばれる刃先がフォークのようにわかれているタイプも出土しています。実は平成元年に身洗沢遺跡の調査をおこなった際にも、そっくりな又鋏が出土しています。並べてみると、非常に良く似ていることが分かります。出土地点は400mほど離れているのですが、同じ人が作ったのでしょうか。もしくは柄の太さなどに応じて規格が決まっていたのでしょうか。



谷村城

谷村城では、奈良・平安時代から近代に至るまでの遺構が発見され、明治時代に置かれた谷村区裁判所に関連した一号石列遺構が出土しました。

一号石列遺構は、長さ10.5m・幅3mで、緑色凝灰岩の切石を7列敷き、その両側に溶岩の切石を埋めていました。

この石列は裁判所を写した大正時代の写真にも見られます。



発掘調査の結果、都留市の中心市街地には近代の旧地表面が地表下40〜60センチメートルの深さに残されていることが分かりました。



裁判所の歯ブラシ

谷村区裁判所の遺構面からは、骨製の歯ブラシやワインボトルなどの遺物が見つかりました。裁判所の職員が、新しい西欧文化を取り入れていたことが窺えます。